

Title	光のかたち
Author(s)	籾, 晶子
Citation	デザイン理論. 2012, 59, p. 120-121
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53348">https://doi.org/10.18910/53348</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 光のかたち

藪 晶子／株式会社広告丸

日中、私たちは太陽の光が降り注ぐ景色を光の存在を意識することなく眺め過ごしている。また、太陽が沈み夜の暗闇になっても、人が生みだした人工的な光であるあかりが灯されて周囲を照らしている。こうして一日中、光によりものを見ているという意識はなくなり、光の存在が忘れられがちである。ことに高性能の照明器具が装備されてきている現代の日本の明るい室内においては、光の存在を意識させる物の影さえ、その姿を消している。光の存在に、今一度目を向けるひとつの契機として「光のかたち」を創り出したい。

平面や額装など様々な方式で「光のかたち」の表現を試みている。その中のひとつとして照明作品がある。今回の照明作品では紙を素材とし、筒状に曲げた紙を幾層にも重ねて生まれる影により「光のかたち」をあらわそうとした。

透過性のある紙は背面の影をさえぎらない。その影は紙の層数以上の複雑な多層の影のグラデーションとなる（図1）。

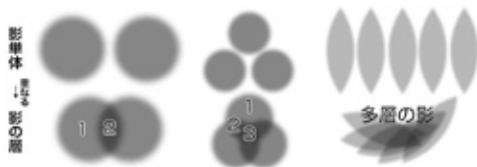


図1 多層の影が作りだすグラデーション

これは紙と紙の間に空間があることによる。影を生みだすことは、空間を生みだすことである。そこで内部に空間をもつ筒状の紙を組み合わせた。四角い平面を筒状にする際、向かい合う辺と角をそれぞれつなげることがで

きるが、光と影を生みだすのは開口部が広くなる対角をつなげた筒形の方が適している（図2）。

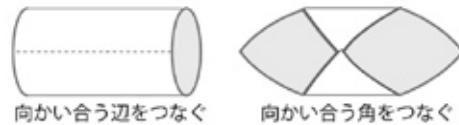


図2 円筒の接点と開口部の比較

これを重ねた多層の円筒を組み合わせて照明器具をつくる（図3）。

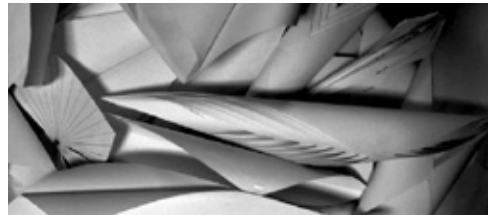


図3 多層の円筒

紙に穴をあける事で、紙のフチだけでなく内側にも重なりを生みだすことができ、より複雑な影の重なりが光により生みだされる。切り抜きには、パソコンからの指示により刃先を制御し作成した線形データどおりに切る事ができるカッティングプロッタを用いた。手作業では不可能な細かさや量の作業が可能となり、同パターンのサイズ違いを正確に切り抜くことができる。

円筒の紙の支持体として磁石がつく鋼材をつかっている。紙と支持体、紙筒と紙筒との接着に磁力を用いているので、取り外し再接着が可能である。接着素材として採用したネオジウム磁石は、1980年代に発明され永久磁

石のうちでは最も強力とされている。

素材として、和紙のように光を通す性質と丈夫なプラスチックの特性をあわせもつ、プラスチック和紙を用いた。破れや濡れや劣化に強く、切り抜きがしやすい利点をもつ。しかし、プラスチック和紙でつくったあかりは、内包する光があまり広がらず、和紙に比べ光のあたたかさが損なわれてしまった。より和紙に近い透け感を追求したプラスチック和紙を検討するなど、新たな素材との出会いを意欲的に求め、素材が作品の制約になるのではなく、光のかたちにあわせた素材選びができるよう努めたい。

今回展示した照明作品は、各々同形であるがサイズは異なる部位からなる。組み合わせ場所や数を変えることで多くの形がつかれる。これを示すために、2点は同形同数の部位からなる作品を併置して展示した(図4)。

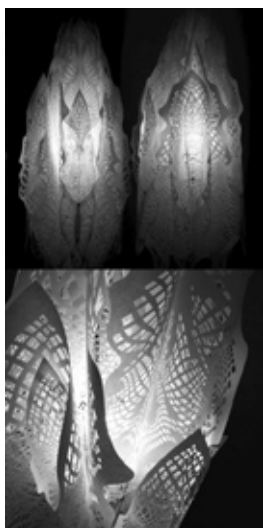


図4 同形同数の部位からなる併置された照明作品と拡大

強さや種類の異なる光源を用いた。その中の1つは次世代のあかりと称されているLEDである。光源の違いは、見え方だけでなく、素材との相性にもあらわれる。発光効

率が良いLEDの光は発熱が少なく紙と相性の良い光である。これにより光源と紙の距離が近い照明作品をつくることが可能となった(図5)。

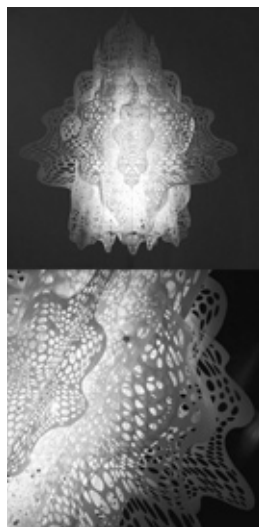


図5 LED電球を光源とした照明作品と拡大

古来から日本に息づいてきた陰影ある光の感性に目をむけ、影を生みだし「光のかたち」をあらわそうとした。そうして生まれた作品は、伝統的なあかりを踏襲しつつ、現代の技術を取り入れた新しい「光のかたち」となっている。

この制作の過程で、新しい光の技術や今後の展望を知る事ができた。それと同時に古くからわれわれ日本人が培ってきた光へのまなざしを顧みる機会となった。新しい技術や価値観を取り入れるだけでなく、古来の技術と美意識を存続させていく努力も必要である。身近にあるうちは意識されず忘れがちな伝統は、冒頭に記した光の存在のようである。このまま気付かず絶えたならば、取り戻すことは難しい。残された古来の伝統に共感と誇りを持つ今の感性を忘れず、日本が育んだ美意識やまなざしを大切にしていきたい。